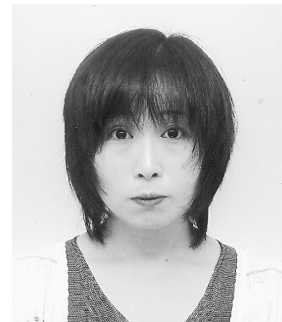


— 長期研修を終えて —

生きる力を育む国語科指導法の研究

～「読むこと」の基礎・基本を育む確かな授業実践を目指して～



大宮区 三橋中学校 教諭 西尾 浩子

1 はじめに

日頃の授業の中で、「子どもたちに生きて働く言葉の力を育みたい」と思いつつも、自分の国語教室に課題を感じていた。その課題の原因は何なのか、その突破口はどこにあるのかを探ることが、この研修のスタートだった。

2 研究の概略

(1) 生きる力を育む国語科指導法について

この研修期間に、私自身の国語教室の課題と各種答申や調査結果を比較・検討した結果、「生きる力」について、国語科で身に付けさせたい力は、①考える力と感じ、想像する言葉の力（普遍的に求められている国語の力）②他者との関係を築く社会的な言葉の力（特に今日的に求められている国語の力）であることを明確にすることができた。

これら2つの力を育成する学習過程構想としては、「課題の把握→テキストの解釈→熟考・評価→論述」という学習過程である。上記①を、その授業で「身に付けさせたい力」として、しっかり授業者や学習者が意識した上で、「学び合い」のある授業が展開されなければならない。この「学び合い」を効果的に展開する上では、「学習の手引き」の果たす役割は大きい。この授業過程の構想については、さいたま市国語力向上プランが、さまざまな先行研究で述べられている諸理論を一本の鎖のように結び付けてくれた。さいたま市国語力向上プランでは、「書く活動」を重視しているが、書く活動がもたらす効果に関する諸理論

をきちんと踏まえているといえる。書く活動により、個の学びを充実させ、学び合いへと展開し、最終的に自分の考えを表現して深めるという学習過程が、②の力を身に付ける学習過程であると言える。つまり国語科として「生きる力」をはぐくむためには、「身に付けさせたい力」にポイントをしぼった学習活動に「学び合い」の学習活動も必要ということである。これは、「話すこと・聞くこと」の領域で身に付ける「話し合い」の力と他領域の「学び合い」の2本立てで、年間を通して地道にはぐくむことが大切であるということだ。

また、これまでの研修を踏まえて全領域を含んだ年間指導計画・評価計画を作成、提案することもできた。いくつかの単元を除いて原則的には、1単元1領域の指導に重点を絞った。全領域を含んだ年間指導計画になっているのは、学習活動における指導の系統性を明確にしたかったからだ。

3 おわりに

この研修期間の一番の収穫は、多くの本、多くの人、多くの授業といった様々な「出会い」であったように思う。小学校も含めて100本もの授業を参観できたことは、小・中学校の連携を考えるうえでも貴重な体験になった。

だが、私にとっては新しい学びであっても、当たり前のことを確認したに過ぎない。謙虚に地道に実践する中で、その学びを確かなものにして子どもたちを育んでいきたい。多くの出会いに感謝して。

(にしお ひろこ)